

J-SAILING

JAPAN SAILING FEDERATION



NO.100

www.jsaf.or.jp



楽しさ広がる！
ナビスコリッツ



ヤマザキナビスコ

JSAFからのメッセージ

海に出よう！

新学期を迎え、中学生に、高校生に、
そして大学生になった諸君、おめでとうございます。

また、希望に燃えて新社会人となったセーラーたちにも
お祝いを申し上げます。

「心ままなる人間はいつでも海が好きである。」

(ボードレール/中原中也訳)

四周海で囲まれた日本の若者たちは、
昔から「われは海の子」でした。

とくにセーリングスポーツは、
勇気、忍耐、冒険心、創造性、チームワークなど
人間にとって基本的な資質を養う素晴らしいスポーツです。

セーリング・シーズンも開幕、海に出よう！

安全を第一に、風や波や潮を相手に
セーリングスポーツの醍醐味を楽しむことを
お勧めしたいと思います。

JSAFのメンバーになれば

- ・メンバーズカードが発行され、公式競技参加の資格が与えられます。
- ・会費の一部が傷害保険の保険料に充当され、セーリングの事故による死亡、後遺障害に適用されます。
- ・JSAFの会報誌「J-SAILING」が送付されます。(高校・ジュニアを除く)
- ・各種講習会などに参加でき、資格を取得する際の条件に適用されます。
- ・「J-SAILING」をはじめ、所属する加盟団体からもセーリングに関する各種行事やレース日程などの情報が提供されます。

加入、更新手続きの詳細は各加盟団体にお問い合わせください。

<http://www.jsaf.or.jp/dantai/>

420級、 国体種目に決定!

インターハイにも採用!!



昨年の420級全日本の1シーン。強風から微風まで様々なコンディションでパフォーマンスを発揮すると言われる420級の強風下の走り (photo by Junichi Hirai)

国体種目が変わる

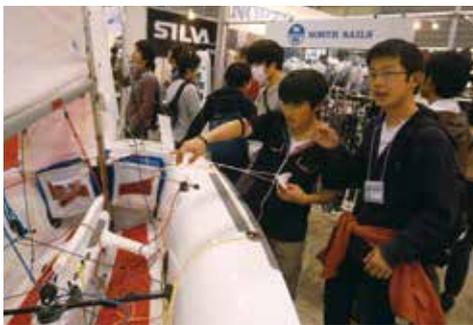
第70回国民体育大会(和歌山)から変更となる国体種目は別表のとおり。

少年男子、少年女子のセーリングスピリッツ級に替わって420級、成年男子の国体シングルハンダー級に替わってレーザー級、成年女子、少年男子、少年女子のシーホッパー級スモールリグに替わってレーザー級スモールリグに替わった。成年男子の470級、成年男子、成年女子の国体ウインドサーフィン級、成年女子のセーリングスピリッツ級には変更がない。

また、この決定に先立って、2015年からインターハイの艇種にこれまでのF1級に加えて420級が採用されることが決定した。これにより、高校生たちは国体とインターハイにおいて同じ艇種でレースを競うことができるようになる。

この結果、艇の購入や技術習得などにかかる資金的、時間的な負担を軽減でき、ユース世代のセーリング環境はさらに整備されることになるだろう。この決定は高体連にとっては大きな変革である。

種別	現行種目	変更後種目
成年男子	470級	変更なし
	国体シングルハンダー級	レーザー級
	国体ウインドサーフィン級	変更なし
成年女子	セーリングスピリッツ級	変更なし
	シーホッパー級スモールリグ	レーザー級ラジアル級
	国体ウインドサーフィン級	変更なし
少年男子	セーリングスピリッツ級	420級
	シーホッパー級スモールリグ	レーザー級ラジアル級
少年女子	セーリングスピリッツ級	420級
	シーホッパー級スモールリグ	レーザー級ラジアル



420級の前で、熱心にボートをチェックする高校生セーラーたち (3月の国際ボートショー会場で。photo by J-SAILING)

2015年の和歌山国体から、ヨット競技の種目に420級、レーザーラジアル級が採用されることが決まった。これまでJSAFはジュニア・ユース世代が国際的なレベルへ成長するための方法を模索してきた。ISAFユースワールドに使われる420級、そして五輪種目のレーザーラジアル級の国体採用で、ユース世代の国際化の流れは一気に加速する。

変更に至る経緯

世界標準のクラスで常にセーリングすること、つまり国際的に普及しているクラスを使って国内で練習し、それでレーズを戦わねば、世界のスタンダードに選れてしまうという議論は以前からあった。世界で戦うためには、セーリング先進国で普及するクラスに乗るのは自然な流れだろう。現に470級やレーザー級は国内でも広く普及し、470級はそれなりの成績を国際的に残している。

しかし、470級へステップアップする前のジュニア・ユース世代の国際標準化というミッションは実現されないまま時が過ぎていった。

そこで、JSAFは2010年の千葉国体会場で「国体セーリング競技参加指導者・選手アンケート」を実施した。「国体、インターハイ、インカレにどんな艇種を採用したいか」「艇種を変更する可能性と問題点は何か」などを問うアンケートだった。

アンケートの回答には420級、レーザーラジアル級の導入を望む声が多くあった一方、現状維持を望む意見も見られた。その理由は「変更に伴う資金の問題」「他の競技会との種目の違い」「指導者不足」「行政の支援が得られない」などであった。

また、2011年2月にJSAFが一貫指導プログラムの再構築についてというテーマで会議を開いたところ、インターハイ種目、国体種目、インカレ種目の変更を推進すべしとの意見の一方で、それを実現するための壁の高さが改めて浮き彫りにされた。当時の河野博文副会



長(現会長)の「それぞれに事情があり、一気には解決しない状況に」目からウロコが落ちる思いだ」との言葉が象徴するように、難関が山積する状況だった。(本誌88号、89号参照)

JSAFが機関決定

しかし、ユース世代の国際標準化を進めるには420級、レーザーラジアル級の採用がもっとも効果的と判断したJSAFは、西岡一正副会長をリーダーとするプロジェクトチーム「ユース制式艇種制定導入のための実行委員会」を立ち上げ、阻害要因を一つひとつ取り除く作業を始めた(制式艇種とはJSAFが制度として採用する艇種)。

実行委員会にはまず、高体連ヨット専門部、国体委員会と協力して各水域で意見交換会を行い、制式艇種を決定する際の問題点をていねいに洗い出し、それを解決するためのアイデアを集約した。

その過程で、「国体とインターハイが同一の艇種を使うこと」「最初の導入時にかかるコストについてはJSAFが何らかの経済的支援を行うこと」「県連、高校ヨット部、ジュニア・ユースクラブの協力体制を築くこと」「指導者の育成を強力に推進すること」などの方針が決まっていた。

その後も意見交換会や議論が重ねられ、2012年1月、JSAFは「ユース世代制式艇種に420級、レーザー級を採用すること」を機関決定した。(同94号参照)

セーリング界全体で支える

その後、実行委員会は、ユース世代の

制式艇種の導入を現実的にどのように進めるべきかに関し、各都道府県連の意見や要望を知るためにアンケート調査を行い、現場のニーズを探る努力をした。それと並行して「420級購入資金援助のお願い」の文書を発表した。(同97号参照)

高校総体、国体少年種目変更を促すためにも、420級が国内で普及していなければならぬ。高体連に加盟する高校ヨット部は123校あり、各校に420級を1艇ずつ無償で提供するための資金は概算で6千万円。JSAFが一部を負担するものの、すべてをまかなうには資金が足りないため、企業や関連団体からの献金を募る一方、ユース世代の先輩にあたるJSAFの個人メンバーに寄付をお願いするという呼びかけをした。

この呼びかけは奏功し、昨年の12月末の段階で2千4百万円の寄付が集まり、これらの資金により420級が高校ヨット部に配布されているまさにそのとき、今回の国体の艇種変更が認められたわけである。なお、資金はまだ2千万円ほど足りず、引き続きの支援をJSAFでは求めている。

地域セーリングの環境整備と指導者の育成が今後のテーマ

セーリングがユース層に普及するには、楽しいボートに集中して乗り、セーリングの面白さに目覚めることが必要だろう。また、OP級に乗るセーラーが次のボートにスムーズに移行できれば、子どもたちの選択肢が広がり、OP級を卒業しても長くセーリングを続けることができるだろう。

今回の420級の普及はこれを実現するための方策の一つとして行ったものだが、さらに大切なことは、地域でセーリングを楽しむシステムを作ることである。そして、このシステム作りには都道府県連と高体連、セーリングクラブの方々の連携が必要になるとJSAFは考えている。

そこで、指導者の方々の参加を促すために、JSAFは必要な手助けを用意したいと考える。

一つの例として、ユース世代の選手やコーチの育成を、オリンピック選手育成強化とも連動させようとのアイデアも出ている。五輪を目指す選手を対象に行われる強化合宿にユース選手やコーチを招聘するのだ。さらには、高体連とも協力して、インターハイの成績優秀者が国際大会に出られるシステムを作ろうとの考えもある。その試合に顧問の先生やコーチが帯同できるようにすれば、高校生セーラーのモチベーションがいつそう高まるはず、というものだ。

また、インターハイの種目にシングルハンダーを望む声も徐々にではあるが高まり始めているという。こちらは420級以上に採用に至るハードルは高いと聞くが、もしこれが実現すれば、高校生たちにとって世界への道はさらに広いものとなるだろう。

去る3月、横浜で行われたボートショー会場では、神奈川県下の高校に配布されたばかりの420級が展示されていた。その前で5、6人の高校生たちがシートを取り回しや乗り方に関する話を熱心に交わし、新しい艇種を前に興味津々の様子だった。

今回の420級の国体採用決定、そしてインターハイへの導入が、日本のユースセーラーがグローバルスタンダードへの道を歩む大きな一歩となると予感させるシーンだった。

JYMA選抜大学対抗マッチレース

3月15日～17日、於：日産マリーナ東海

2回目の開催となる「JYMA（日本ヨットマッチレース協会）選抜大学対抗マッチレース」。大学生のヨットレースといえば、すぐにインカレを想起する。インカレを目標に練習し、最高のパフォーマンスを発揮し、卒業する。しかし、若く貴重な時間をセーリングに費やしたというのに、セーラーとしての技量、経験をその後に活かすことなく、燃え尽きてしまう選手も少なくない。大学対抗マッチは「インカレで燃え尽きないで」をテーマの一つとし、大学卒業後のセーラーの新たな道筋を描くことを使命として生まれた。

悔いの残る戦いを!

レポート／今津浩平 (JYMA 理事／アンパイア)
写真／平井淳一

総当たりで2位だった和歌山大学は、決勝戦で関西大学を下し優勝。写真は立命館大学との対戦で先行する和歌山大学



3位 関西学院大学



2位 関西大学



1位 和歌山大学



6位 同志社大学



5位 早稲田大学



4位 立命館大学



9位 金沢大学



8位 東京大学



7位 九州大学



12位 中部学連選抜チーム



11位 東北大学



10位 慶應義塾大学

実行委員長・田代和史

3月15日の大会初日。集まった学生たちの前に大会実行委員長が現れた。田代和史氏（54歳）。同志社大学ヨット部出身。社会人ヨットでの活動を経て、現在でもマッチレースのクルーをこなす。JYMAの副会長であり、若い頃はロサンゼルス五輪を目指すナショナルチームの470級スキッパーとして活躍した実績があるセーラーの鏡のような人だ。

「みなさんはインカレでレースに臨む際、コーチや監督から、必ず、こう言われたと思います——「悔いの残るレースはするな！」「悔いが残らぬよう全力を尽くせ！」と。しかし、今日は違います。私はこう言わせてもらいます——「思い切り悔いを残してください」。思い切り悔しい思いを胸に残して、これからもセーリングを続け、楽しんでもらいたい。そのための大会なのです」

「みなさんはインカレでレースに臨む際、コーチや監督から、必ず、こう言われたと思います——「悔いの残るレースはするな！」「悔いが残らぬよう全力を尽くせ！」と。しかし、今日は違います。私はこう言わせてもらいます——「思い切り悔いを残してください」。思い切り悔しい思いを胸に残して、これからもセーリングを続け、楽しんでもらいたい。そのための大会なのです」

「みなさんはインカレでレースに臨む際、コーチや監督から、必ず、こう言われたと思います——「悔いの残るレースはするな！」「悔いが残らぬよう全力を尽くせ！」と。しかし、今日は違います。私はこう言わせてもらいます——「思い切り悔いを残してください」。思い切り悔しい思いを胸に残して、これからもセーリングを続け、楽しんでもらいたい。そのための大会なのです」

協賛、協力体制

本レースの実現には多くの方々にご協力いただいたが、その数の多さたるや通常のマッチレース大会とは比較すべくもない。

「みなさんはインカレでレースに臨む際、コーチや監督から、必ず、こう言われたと思います——「悔いの残るレースはするな！」「悔いが残らぬよう全力を尽くせ！」と。しかし、今日は違います。私はこう言わせてもらいます——「思い切り悔いを残してください」。思い切り悔しい思いを胸に残して、これからもセーリングを続け、楽しんでもらいたい。そのための大会なのです」

まずは、協賛社として富士ゼロックス株式会社。2年連続で大会にご理解をいただいた。関係者として心から感謝したい。それに続くのは、国内で活躍するキールボートの艇名だ。エスメラルダ、祖国丸、月光、シエスタ、ガスト…… JSAFキールボート強化委員会が主体と

なっており、大会スタッフがオーナーと会い、協賛を募ったものだ。誤解を恐れずに言うと、オーナーたちにとっても、学生ヨットで鍛えられたセーラーを次のステップとして受け入れたいという思いは非常に強いはずだ。主催のJYMAと徹底した協力体制を敷いたJSAFキールボート強化委員会と同じ願いや希望が、ここにはある。せっかく学んだヨットなのだから、インカレで燃え尽きず、生涯スポーツとして卒業後もやっていこうじゃないか、と。

キールボートへのステップアップ

今回集まった12校の選手たちは学連で鍛えられたヨットレースの熟練者だが、キールボートとマッチレースについては初心者に等しい。

彼らはインカレが終わった後、本大会を目指して練習を開始した。一部の選手を除き、今年の1月から練習を始めたばかりだ。JYMA、JSAFキールボート強化委員会、有志が、日本各地で主にJ/24による練習会を企画し、選手たちは都合に合わせて、それぞれのイベントに参加しつつ腕を磨いてきた。その開催地は関東（相模湾）、日産マリナー東海志摩YH、和歌山セーリングセンター、小戸YH、新西宮YH他と様々。

選手の意気込みも凄まじいが、それをサポートするボランティア陣の熱意にも頭が下がる。学連OBを中心とする一流のキールボート選手たちが指導を申し出て、彼らの技術を惜しみなく伝えた。少ない機会に加えて、冬場の悪コンディ

2日目の強風ではマッチレースのタクティクスに加えて、ハンドリングの難しさが加わったが、各チームともキールボート初心者とは思えないほどレースごとにうまくなっていた



■講評 チーフアンパイア 田中正昭

フライトを重ねるごとに選手たちが上達するのにはいつも驚かされます。練習の賜物と言えますが、一方で大学ヨット部で鍛えられた実力が発揮されたということでしょう。インカレ上位校がひしめく中で、ダークホース（失礼！）和歌山大学が見事に優勝したことは興味深いですね。マッチレースは、慣れない艇を即座に乗りこなす感覚とフィジカルなクルーワーク、戦術やルールの理解度、不利になっても切り替えて挽回を狙うメンタルなコントロール等々、セーラーとしての総合力が試されます。その面で大和は少しだけ他校よりかみ合ったのかもしれませんが。今回の経験は、皆さんのこれからのセーリングに必ずや役に立つことでしょう。

■今回は無念の最下位 中部学連選抜チーム 佐藤洋一

「インカレ上位校に食らいつく」「中部の学生をキールボートへ」この2つの命題を掲げて結成した中部学連選抜チーム。悔しい結果になってしまいましたが、この半年間の活動を通して実に様々なセーラーとの出会いがあり、今回のマッチイベントを通じて一気にヨットの世界が変わりました。世代、大学、水域を越えてセーラーと繋がることができた今回の経験は、私たちにとても大きな財産になっていくと思います。

3月中旬は、セーリングにとって比較的いい季節だ。厳しい寒さは去り、強烈な季節風や突風の危険も少ない。むしろ今年は想像以上に好天に恵まれ、レース委員長をやや悩ませることになったが、それでも初日と最終日は無風、微風ながら、2日目は絶好の良風の中で多くのマッチを行うことができ、結果、3日間の会期内で予定されていた対戦が概ねすべてこなせたのだから、コンディションも上々だったと言って良いだろう。

素晴らしい執戦

シヨンもあり、納得のゆく練習ができたチームはそうはいなかったと推察する。だが、筆者もいくつかの練習会に参加したが、彼らの上達度は素晴らしく、運営陣の熱意にも支えられて、見事なまでに短期間で、「戦える」マッチレーサーに育った。

■優勝の和歌山大学 スkipパー 山崎 晃

5つの頭と10の目をフルに活用する。そして、5人それぞれの役割をそれぞれが責任を持って果たす。これが一番の勝因です。今年卒業の私と、和大大OBでチームシエスタの河淵さん以外のクルー3名は後輩に乗ってもらいました。なぜなら、ディンギーを引退してからもこんなにも楽しいヨットレースがあることを知ってほしかったからです。実際、レース終了後「引退してからもキールボートに乗って活躍したい!!」という声が聞け、嬉しかったです。今大会では同世代のセーラーと戦うことができて幸せでした。また皆さんと海の上で戦いたいです!

微風から強風というバラエティに富んだ風域の中、まずは全12チームによるラウンドロビン（総当たり）で勝敗が競わ

優勝は和歌山大学

大会3日目。ラウンドロビンも残り2フライトまで来たところで、三河湾はいったん鏡のような海面となった。暖かい快晴の天気。艇上にも半袖姿が目立つ。これは万幸だったかに見えたが、午後1時を過ぎた頃、まず東から微風が入り込

また、彼らが背負う大学名がその背中を押す。ラウンドロビンの66マッチのすべてが見応えのあるマッチとなったが、とくに最終マッチの早慶対決は、大学対抗マッチの象徴的シーンだったかも知れない。レース前に艇上にて両校の応援歌が交わされ、それに続くマッチは息をむほどの熾烈なものとなった。レース後に石黒レース委員が、「あのクルーワークがあれば、もっと上位にいたでしょう?」と、呆れかえるほど見事なクルーワークが生まれたのも、短期間で上達できる若さを備え、かつ学校の名誉を背負っている大学生ゆえにせる技なのだと確信する。

それにしても、さすがに学連で鍛えられてきた選手たちだと感服する。マッチレースの勘所がまだ押さえ切れない戦術的な稚拙さは見え隠れするものの、セーリングには経験と実績に裏付けられた力強さがある。それゆえに、スタートで後塵を拝しても、諦めはまったく見られず、そこからしつかり逆転を見据えたレースとなる。

12チームの総当たりをすべて消化するために66マッチ。1フライトあたり3マッチが同時に行われるので、22フライトが必要になる。通常のコンディション下で1日に消化できるフライト数は8から9だから、3日間の会期でもかなりタイトなスケジュールとなる。選手たちは微風から強風まで、あらゆる状況下で練習の成果を試されることとなった。



田中正昭 チーフアンパイア (左)。右は観戦に訪れた河野博文 JSAF 会長

ラウンドロビンの66マッチはもちろん、それに続いた熾烈な決勝マッチは、大学対抗マッチの歴史に残る戦いになった。ごく短期間でこのレベルまで技量を高めた優秀な学生セーラーたちが、卒業後もキールボートの世界で活躍してゆくことを願ってやまない。

さらに、彼らが背負う大学名がその背中を押す。ラウンドロビンの66マッチのすべてが見応えのあるマッチとなったが、とくに最終マッチの早慶対決は、大学対抗マッチの象徴的シーンだったかも知れない。レース前に艇上にて両校の応援歌が交わされ、それに続くマッチは息をむほどの熾烈なものとなった。レース後に石黒レース委員が、「あのクルーワークがあれば、もっと上位にいたでしょう?」と、呆れかえるほど見事なクルーワークが生まれたのも、短期間で上達できる若さを備え、かつ学校の名誉を背負っている大学生ゆえにせる技なのだ

両校ともに緊張感に包まれる中、最終マッチのスタートが切られた。逃げる関西大学、それを追う和歌山大学。風下のレグでシャドウに入れた和歌山が一気に関西に追いつき、下マークでマークルームを奪う。が、わずかに空いたマークルームを見逃さず、そこに関西が入りこむ。まったく目を離せない。最後の上マークでは今度は関西が和歌山をゾーンのわずか外側でブロックする。タックを返してマークアップローチに入るところで、和歌山が内側からオーバーラップして、マークルームを奪おうとする。関西はさすがにラフアップ。アンパイアの判定はグリーン&ホワイト（両艇ペナルティなし）。ここで勝負あったか。この先行の差をキープしたまま和歌山が先にフィニッシュラインを横切り、2013年大学対抗マッチは、和歌山大学の優勝にて幕を閉じた。

み、その後少し南に振れた後、安定した風が吹き始めた。ラウンドロビン22フライトが完遂され、ここまでの成績が掲示される。第1位は関西大学、第2位は和歌山大学。この2校で決勝マッチが競われる。予定では3戦マッチ2勝先取方式だったが、時間はなく、一発勝負となった。